

天にいます我らの父よ

マタイ6：9～13で、主イエスは祈るときにはこう祈れと言われて、一般に「主の祈り」と呼ばれている短い祈りを弟子たちに教えられた。この祈りはキリスト者の祈りの模範であり、そのひな形である。だれに向って祈るべきか、どう祈るべきか、何を祈るべきか、が凝縮されたかたちで教えられている。ロイド・ジョーンズは「天にいます我らの父よ」という、この短い呼びかけのこぼに「祈りの真髄」があると言う。

主イエスはまず、神に向って「アッバ／父よ」と呼び掛けるよう教えられた。これは、当時のユダヤの世界では幼い子が父親に呼び掛ける親愛の情に満ちた呼びかけの言葉であるという（パパ！父ちゃん！）。神に向って「父よ」と呼び掛けることができるということは何という恵みであろうか。

しかし、神が私たちの父であり、私たちが神の子であるということは、決して自然で、当然なことではない。罪ある存在である私たちが神の子とされるためには、尊い代価が払われねばならなかった。イエス・キリストが私たちに代わって十字架に死に、罪を贖い赦しの道を開いて下さったことによって、今や私たちは、キリストにあって「アッバ、父よ」と呼び掛け、大胆に神の恵みの御座に近づくことができる者とされたのである。

しかし、この「父なる神」は同時に「天にいます」お方でもあることを覚えよ、と主は言われる。それは二つのことを私たちに教える。第1に、私たちが「父よ」と呼びかけることを許された神は、いと高きお方、徹底的に聖にして義なるお方であるから、常に恐れおののきつつ、尊敬と畏敬の念をもって、その御前に近づかなければならないということ。

第2に、神が「天にいます」ということは、神の「力」と「主権」を表している。神は万物の主権者であり、その全能の御手をもって天地の一切のものを支配し給うお方であるということ、従って、如何なる時にも、そのお方にまったく信頼して祈れ、ということである。

最後に、主は「わたしの父よ」ではなく、「わたしたちの父よ」と複数形で祈ることを教えられたことに注意しよう。キリスト者の祈りは「連帯の祈り」である。キリスト者は一人で神の前に立っているのではない。キリストにあって兄弟姉妹とされた者たちと共に立つ。そして、祈りにおいて、神の前に「我らの父よ」と共に祈りつつ近づくのである。主の祈りは、そういう意味で、教会の祈りである。キリストを贖い主として一体とされた恵みの共同体の祈りである。

主イエスは、別の箇所でも次のように言われた。「はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうちで二人が地上で心を一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである」（マタイ18：19、20）。声を合わせて「天の父よ」と呼び掛けて「主の祈り」を共に祈ることのできることは何と幸いなことであろうかと思う。